

## &lt;前回：キルケゴールとシェリング&gt;

## (1) 広義の実存哲学：本質から実存へ＝観念論を超えて

## 2. 19世紀のドイツ思想史におけるシェリングの位置：本質主義から実存主義へ

シェリングをカント以降のドイツ観念論の文脈に位置づけると共に、とくに後期シェリングの思想をヘーゲル的な本質主義に対する批判としての実存主義の起点と捉えている。

## 3. 実存主義：人間の現実や実在を本質存在から区別された「実存」(現実存在) — この実存の内容をどう理解するのか、つまり実存の基本的メルクマールを何にするかについては様々な立場が存在する — として規定し、人間存在の生きた現実を合理的に把握可能な諸本質とそれらからなる論理学の体系とから演繹することはできないとする思想的立場。

本質主義：論理体系において合理的に演繹される諸本質から人間を理解する立場(ヘーゲルに典型的に見られる汎論理主義)。哲学思想に広く見られる主要な思想的動向。  
波多野ならば、合理主義。

## (1) シェリング(1775-1854)

## 4. 本質主義(ヘーゲル)と実存哲学(後期シェリング→キルケゴール)の関係

→ シェリングの言う消極哲学と積極哲学の関係。

## 6. 前期の「同一哲学・消極哲学」から後期の「哲学的経験論・積極哲学」への変化(発展)と、両者の相補性。

## 7. 中期シェリング：『人間敵自由の本質』(岩波文庫)

・「真の対立が、すなわち必然性と自由の対立」(15)、「人間をその自由とともに神的存在者そのものの内に救い上げ、人間は神の外にあるのではなくして神の内にあるのであり、彼の働きそのものも神の生の一つとしてその生に属する」(26)

「自然哲学」「実存する限りの存在者(das Wesen, sofern es existiert)と単に実存の根底である限りにおける存在者(das Wesen, sofern es bloss Grunde von Existenz ist)との間の区別」(58)、「神はその実存の根底を自己自身のうちに有しておらねばならぬ」、「神の実存の根底」「神のうちなる自然」「重力」「暗い根底」(59)

「憧憬」「欲望」「予感する意志」(61)、「憧憬の言葉」「悟性」

「諸力の中心点として成立する生きた紐帯の方は霊魂である」(66)

↓

第一の原理：自然、暗い原理

第二の原理：発言された言葉、悟性、光の原理

第三の原理：霊魂、精神(両原理の生きた同一性)

・悪の可能性：両原理の分裂可能性。人間を神より分かち原理としての我性。「我性は光より分離することができる」(71)

・悪の現実性：「必然的な紐帯ではなくして自由な紐帯」「悪への促し」「誘惑」(87)

「激発」「自由、精神、我意」の「共働」(91)、「被造物の非合理的な或いは闇の原理の激発」「現動化された我性(aktivierte Selbstheit)」(92)。

## 8. 中期における三重のポテンツ論は積極哲学・後期においても反復される。

## (2) キルケゴール(1813-1855)

## 1. キルケゴールの思想的特徴

## ① 宗教批判者としてのキルケゴール

真のキリスト教と、近代市民社会において墮落したキリスト教

→ バルト(啓示と宗教との区別)

## ② 反ヘーゲル主義 → 実存主義の先駆者

真理：客観性としての真理／主体性としての真理

体系：論理学の体系は可能である(諸イデアの相互関係)／しかし、歴史的な現実存

在 (=実存) に関わる事柄についての体系は、人間には不可能である  
同時代性と同時性：信仰はキリストと信仰者とが同時に立つことによって可能になる。主体的真理として、無限の情熱の対象として、決断的に関わること。  
ベルリン大学で後期シェリングの講義を聴講。

## 2. キルケゴールの宗教批判＝現代批判と市民社会のキリスト教

### 3. 単独者の思想

「キリスト教的な英雄的精神とは、人間がまったく彼自身であろうとあえてすること、ひとりの個体的な人間、この特定の個体的な人間であろうとあえてすることである、一かかる巨大な努力をひとりでなし、またかかる巨大な責任を一人で担いながら、神の前にただひとりで立つことである」 → 単独者 → ルター信仰

### 4. 不安 (『不安の概念』岩波文庫、1844)

「不安は原罪の前提であり、同時にそれは原罪をその根源の方向に遡って解明するものである、ということ」(37)、「無垢は無知である。無垢においては人間は精神として規定せられているのではなしに、おのが自然性との直接的な統一において質的に規定されている。精神は人間のなかで夢見ている」(65-66)、「不安とは夢見る精神の規定であり、それ故にそれは心理学の領域に属している」、「ほのめかされた無」、「可能性」(66)、「なりうるという不安な可能性」(72)、「いまや墮罪が出現する。墮罪は質的な飛躍なのであるから、心理学はこれを説明することはできない」(78)

### 5. 絶望 (『死に至る病』岩波文庫、1849)

「人間とは精神である。精神とは何であるか？ 精神とは自己である。自己とは何であるか？ 自己とは自己自身に関係するところの関係である、すなわち関係ということには関係が自己自身に関係するものになることが含まれている、— それで自己とは単なる関係ではなしに、関係が自己自身に関係するというそのことである。人間は有限性と無限性との、時間的なるものと永遠的なるものとの、自由と必然性との、総合である。総合とは二つのものの関係である。しかしこう考えただけでは、人間はいまだなんらの自己でもない。」(20)、「絶望とは自己自身に関係する関係としての自己(総合)における分裂関係である」、「総合のうちに分裂の可能性が存するのである。」(24)、「絶望とは分裂関係から結果し来るのではなく、自己自身に関係する関係から結果し来るものだからである。そして人間は自分の自己から脱け出ることができないように、自己自身への関係から脱け出ることができない。」(27)、「自己のうちなるこの病」(29)

### 6. 「本質／不安」から「実存／絶望」へ：墮罪＝飛躍

### 7. 人間の自己：自己関係という構造を組み入れた関係的存在

・人間＝自己関係的存在→自己になる課題→不安と絶望の可能性

### 8. 実存弁証法と真のキリスト者への道

・精神の発展プロセス：この「プロセス」はいわば範例であり、言辞油の記述ではない。

「美的段階 → 倫理的段階 → 宗教性A → 宗教性B」

## 8. テイリッヒとハイデッガー

A. キリスト教思想にとってのハイデッガー

B. 「テイリッヒとハイデッガー」から「キリスト教思想と哲学」を考える

### (1) 問題状況・思想状況

1. 第一次世界大戦以降の思想状況：19世紀的な近代的知を超えて

19世紀(近代)：歴史主義(自由主義神学・人文社会科学)

と超越論思惟(カント哲学、新カント学派。諸学の哲学的基礎づけ)

↓

現象学運動と弁証法神学

## 2. ハイデッガー『存在と時間』: 基礎的存在論(人間存在から存在へ。形而上学の再構築)

人間学としての評価 → ブルトマンの場合

「神を語ることは何を意味するのか」における実存概念(体験や内的生活の客体化に対して)の使用、「ヨハネ福音書の終末論」における終末論的今における啓示(神の言葉)への聴従(決断)とそれによる過去からの自由と将来の可能性など。キリスト教的な「この世」解釈が、ハイデッガーの日常性としての「世界—内—存在」と類似している。

## 3. ティリッヒ『社会主義的決断』(1933年)の冒頭。

政治思想は人間理解にその根拠を求めねばならないと述べ、ハイデッガーの『存在と時間』を参照しつつ、「世界—内—存在」における被投性と企投に対応する二つの問いを挙げています。一つは、自らの存在の「どこから」を問う問いであり、存在の「起源」の問いである。もう一つは、存在の「どこへ」の、存在の「要請」の問いであり、それは起源の閉域を突破するように促す。この二つの問いが政治思想として展開するところに、政治的ロマン主義と自由主義・社会主義の二つの系譜が成立し、ティリッヒは自らの宗教社会主義を、社会主義と起源の力の再統合として提示する。

## 4. ハイデッガーの思想展開、『存在と時間』の中断。

ハイデッガーの「存在」

存在と存在するものの存在論的差異 → 存在忘却

存在の歴運・歴史性(存在史)、真理論

形而上学批判から形而上学とは別の思惟へ

西洋の思惟の総体としての「存在—神論」(Onto-Theo-Logie)

ティリッヒ「カイロスとロゴス」(1926年)

真理の歴史性、超時間的な真理ではなくカイロスにおける真理(ロゴス)

## 5. ハイデッガーの存在と神との関係?

哲学として神について語るには禁欲的、聖書的背景にも沈黙。

## (2) 聖書の神と形而上学的神との緊張関係

## 6. 聖書的な神と形而上学的思惟との緊張

ティリッヒ『聖書の宗教と究極的實在の探究』:

聖書的な思惟とギリシア的哲学的な思惟(形而上学)との差異性あるいは緊張関係を明確にした上で、「両者が究極的な一致と深い相互依存性を有している」(Tillich、1955、357)ことを明らかにする。

## 7. 「聖書の宗教」: cf. カール・バルト: 啓示(神の働き) ↔ 宗教(人間の営み)

## 8. 古代ギリシアという源泉において見られた哲学=存在論

「存在するものの諸領域における存在の現前とその諸構造」についての「存在論的分析」(ibid., 360)。人間は、「自らを問う存在者」、「有限性の中で存在を問う存在者」(ibid., 361)として、「なぜこれはこのようであって、あのようではないのか」「なぜ私は存在するのか」といった問いに直面する。

↓

この問いを組織的に考え抜く努力としての哲学(存在論)は不可避免的。聖書の宗教も存在論と無関係にとどまることはできない。

## 9. 聖書の「人格主義」(personalism):

「人格」とは、「自己自身と、また世界とに関係づけられ、またそれゆえに、理性、自由、そして責任を伴う」、「人間的領域での個別性」(ibid., 366)——いわゆる「我—汝」関係の主体——を意味する。

あらゆる宗教において、「聖なるもの」(信仰において志向されたもの=信仰対象)は人格的な存在として経験される。

## 10. 人格主義: 神を個別性において、つまり、「一存在者」として経験する。

存在論的思惟：神概念。「存在自体」(Being-itself)は「存在する一切のものに現前し、一切のものは存在に参与」(ibid., 368)している。存在論的な問いにおいて、人格的な神の個別性は超越される。

「存在論は一般化し、聖書の宗教は個別化する」(ibid., 371)。

#### 11. 「神—人間」における相互性。

- ・神と人間の人格的關係：自由な相互性に基づく。「聖書の宗教の動的な性格の根源」(ibid., 368)。神の人間創造は自由な人格としての人間存在の創造であり、こうして人間は創造の善性にも関わらず、墮罪の可能性をも有する自由な主体となった。祈りという宗教的行為。
- ・聖書的な人格の相互性は、存在論的神観念(形而上学的な神)に矛盾するよう見える。なぜなら、自由な相互關係が時間、空間、因果律、実体といったカテゴリー内部で成立するのに対して、存在自体はこれらのカテゴリーを超越している。

#### 12. 言葉。

- ・「人格と人格との關係性は言葉を通して現実となる」(ibid.)。啓示は言葉による神の語りかけであり、人間は聴くように求められる。これに対して、「存在論は別のカテゴリーで思考する」(ibid., 369)。
- ・存在論的思惟：すべての存在者は存在自体に参与しそれを分有することによって存在しており、存在自体は、存在するものすべてのなかに現前する。したがって、人間と存在自体との關係は直接的であり、言葉によって媒介されるものではない。
- ・イエスにおける神的言葉の受肉は「聖書の人格主義の完成」(ibid., 371)を意味するが、存在論的思惟にとってはまったく理解不能な事態であると言わねばならない。

#### 13. 祈りにおける神は、通俗的な人格イメージを越えた存在であり、むしろ存在論的思惟と接する地点に立っている。

問われているのは、個々の諸存在論が共有する存在の問いなのである。

#### 14. キリスト教を規定する二つの伝統である聖書の人格主義と存在論的思惟との關係。

「存在論的な問いを問うことは避けられない課題である。パスカルに抗して私はいう、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と哲学者たちの神とは同じ神である。神は人格であり、また同時に、人格としてのそれ自身の否定である。」(ibid., 388)

#### 15. ティリッヒ「神の存在は存在自体である」。

「神が存在自体である」と言えるか？ 聖書の宗教と哲学(存在論)との差異。人間の自らの存在についての問いへの答えとしての「神」象徴。「神」は存在への問いに対する答えである、その点で、「神」の存在は存在自体(存在の根底・存在の力)。

### (3) ハイデッガーと聖書的思惟との關係

#### 16. ハイデッガーはその思索の最初期の時代をカトリック神学との関わりにおいて開始した(神学生であったハイデッガー)。

カトリック神学から離れた後も、『存在と時間』の刊行に至る1920年代において、キリスト教神学との密接な関わりは継続され、同世代のキリスト教神学者との交流は双方に少なからぬ影響を及ぼした。

#### 17. キリスト教思想の側からのハイデッガー理解の正当性については、ハイデッガー研究自体において論じるべき研究テーマ。

ハイデッガーと現代キリスト教思想とが同一の伝統(この伝統に、神秘主義、否定神学、言語論、人間理解などが属している)と同じ歴史的時代を共有しているという観点は、神学と哲学との關係を再考する際に忘れてはならない。

ザラデルのハイデッガー論：ハイデッガー自身は語らぬが、聖書的思惟をその源泉としている。

#### 18. ティリッヒ「ハイデッガーとヤスパース」(1954年)。

後期ハイデッガーと「中世カトリックの神秘主義的伝統」との関係を描き出しているが、このような視点はハイデッガー理解に何をもちこたえようか。

### <参考文献>

#### (1) キリスト教とハイデッガー

- ・ボンヘフファー『行為と存在——組織神学に於ける超越論哲学と存在論』新教出版社、2007年。
- ・ブルトマン『ブルトマン著作集 11、神学論文集 I』新教出版社、1986年。
- ・辻村公一「ブルトマンとハイデッガー——信仰と思惟——」(『ハイデッガー論攷』創文社、1971年)。
- ・小田垣雅也『解釈学的神学』創文社、1975年。
- ・マルレーヌ・ザラデル『ハイデッガーとヘブライの遺産——思考されざる債務』法政大学出版局、1995年。
- ・茂牧人『ハイデッガーと神学』知泉書館、2011年。
- ・マクウォーリー(マッコリー)『ハイデッガーとキリスト教』勁草書房、2013年。
- ・K・リーゼンフーバー『近代哲学の根本問題』知泉書館、2014年。  
「第十二章 ハイデッガーにおける神学と神への問い」

#### (2) ハイデッガー

- ・『ハイデッガー全集』創文社。『ハイデッガー選集』理想社。  
『現象学と神学』、『有と時』(『存在と時間』)、『形而上学とは何か』、  
『カントと形而上学の問題』、『杣径』(「ニーチェの言葉『神は死せり』」)
- ・『ハイデッガー読本』『続ハイデッガー読本』法政大学出版局。

#### (3) ティリッヒ

- ・『社会主義的決断』(『ティリッヒ著作集 第一巻』白水社)。
- ・「カイロスとロゴス」「実存主義」「実存主義的思惟の本質と意味」「近代的思惟における疎外と和解」(『ティリッヒ著作集 第三巻』)
- ・『聖書の宗教と存在の問題』(『ティリッヒ著作集 第四巻』)。
- ・『組織神学』第一、二、三巻、新教出版社。